新生児Special Care Unitにおける母子相互作用の臨床的・心理行動科学的研究

小　川　次　郎（聖隷浜松病院）

われわれはこの三年間に，ＮＩＣＵを含む新生児特別養護施設における未熟児について，早期からの母子接触の意義について検討すべく次の研究を行った。即ち先づ母性側より母親の意識調査，保育器内における母親の行動のビデオによる経続的観察，及び極小未熟児が３才児になったときのretrospectiveな母親の母性性について検討などである。又一方児側については，基礎的研究として，未熟児における行動発達，日内リズムなどを，殊に極小未熟児について２４時間ビデオで分析観察すると共に，ＮＩＣＵにおける照明遮断による行動リズムの影響をも観察した。

Ａ）母性側からの観察

１）未熟児センターに入院した児の母親４０名を対象に自由記述３項目を含む２４項目からなる質問紙による母性性，出生時頃の子供への意識，夫並びに家族の母親からみた意識調査である。母親の母性意識への反応は好意的なものが殆んどであり，未熟児が生れたことに対し，母親の多くは子供にかわいそうなことをしたといったかなり強い罪の意識にとらわれている。又一面これからの育児にさらに一層努力を傾注し，心身とも健康なこどもに育てなければならないとの意識がつよい。

２）次にＮＩＣＵにおける母親の行動の観察では親が示す子への愛情の発露は，面会が子の覚醒時に遭遇し，目の触れ合いを体験した際に示す喜びに示される。親が子をみるときの所作は，面対面の関係で対峙し，その際目と目が合うことに強い関心をもちそれを求めている。母親の子どもへの愛情的絆は相互的な目の見合せといふ刺戟や，体の動きといった信号を享受することが要因として働き形成されると考えられる。

３）母子対面での母性行動の経続的観察はビデオテープから分析されたが，保育器内の児との最初の面会においては，積極的な行動を示す母親は少く，むしろとまどいの姿がみられ，保育器内に手を入れることすらしない。しかし面会が回を追う毎に，児への積極的なtouchingがみられるようになる。児のいろいろの部分と，またいろいろの触れ方をするがやがては親はこどもの手の中に自分の指を入れて握らせようとする行動が観察される。

母性行動のretrospectiveな調査において，母性行動を回想的に述べさせると，母親の多くは揺りかごに移床されて実際に抱いたり，ミルクを飲ませたり，おむつを換えたりするといった母性的養護を通じて母親としての実感を体得しているのである。この実感を膚で感じとってゆくためにも未熟児センターでの早期の母子接触が必要と思われる。

われわれは今後未熟児センターで養護される子と親の関係について一層の検討を加えるとともに一部着手している児の心身発達状況についての追跡的研究をも貴重な課題として取組みたい考えである。

Ｂ）未熟児の保育器内の一日行動の発達 ── 活動量，心拍，呼吸を指標として ──

前述の母親の母性行動とともに，母子観察における児の状態を知ることは甚だ重要である。殊に未熟児，極小未熟児においては，一日の行動，日内リズムの発達を知ることが基本的に重要なことである。そこで保育内における行動発達を身体活動量と生理的反応である心拍数，呼吸数を指標として検討した。今回の研究目的は，１）器内における児の一日行動を発達的とみること。２）ＮＩＣＵでは昼夜ともに明るい環境に養護治療されているので照明を遮断した場合，即ち人工的に夜をつくることによって，日内リズムに如何に影響を及ぼすかを検討するにあった。

われわれは今回合計６例の極小未熟児を主とする未熟児について，ビデオテープによって２４時間連続録画し，活動量，心拍，呼吸を中心に分析検討した。分析方法については，種々検討したが最終的には，２４時間観察を２時間毎のブロックに分け，諸条件をきめて，夫々のブロックから20分の時間を抽出しさらにこれを３０秒毎にグロス

な身体的活動，心拍，呼吸をチエックして表記した。

1）一日の行動の発達，以上の方法により修正在胎週数をもととして，1～2週の間隔で昼夜にわけて前述のパラメーターを用いて観察した。検討の結果は，午前午後，昼と夜については修正在胎週数の増加という発達の側面からみると，必ずしも組織的変化を見出すことは出来なかった。即ち修正在胎週数36週以内においては1～2週間隔の観察では発達による日内リズムには差がみられなかった。しかし31週から33週まで1週毎に観察された一例においては週数が増えるにしたがって身体的活動は次第に減少し，一方心拍数は幾分増加する傾向を示した。

2）照明遮断の効果。この検討に際しては，午前午後にわけ4つの一時間の期間を抽出し5分間12ブロックについて分析された。修正在胎週数が満期にたっした一例については，眼かくしをしない24時間と，夜間のみ眼かくしをした24時間の連続観察を比較検討した結果，眼かくしをした場合は，身体的活動が低下し，心拍数，呼吸数ともに減少しまたその変動巾も小さくなることがわかった。しかし満期在胎週数にたっしていない極小未熟児においては，同じ方法で検討したが，この特徴的変化はみられなかった。満期週数にたっした例が未だ少ないが，満期にたっしない極小未熟児においては未だ日内サーカデアンがみられないように思われた。

以上述べてきたように，本研究では，未熟児における一日行動の発達や，眼かくしによるＮＩＣＵにおける照明光の遮断効果に関して少数例ではあるが興味深い結果を見出すことが出来た。今後更に未熟児の行動の観察と分析を重ねて，今回の結果を一層確めることによって，将来は未熟児を子宮外胎児とみるか未熟児新生児とみるかという問題にまでひろげて行動発達の面から検討したい。

以上は，神谷，日岩両心理学者を中心とするデータのまとめであり将来像でありますが，私（小川）はこの三年間を通じて辛うじて未熟児を中心とする，母側，児側からの臨床的心理的行動科学的研究が軌道にのってきたことを感じます。

これらの研究，殊に行動科学的研究は，生理的研究をも合せて，今後胎児新生児の研究の重要な一面を占めるものと考えます。母子相互作用の重要性をふまえて，今月では未熟児，新生児にかんする基礎的研究を必要といたしますので，産科，小児神経学などの共同研究を是非発展させて行きたく思います。又更に綿密なfollow up studyを通じてわれわれの研究の完成を期待している次第です。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

われわれはこの三年間に,NICU を含む新生児特別養護施設における未熟児について,早期からの母子接触の意義について検討すべく次の研究を行った。即ち先づ母性側より母親の意識調査,保育器内における母親の行動のビデオによる経続的観察及び極小未熟児が 3 才児になったときの retrospective な母親の母性性について検討などである。又一方児側については,基礎的研究として,未熟児における行動発達,日内リズムなどを,殊に極小未熟児について24時間ビデオで分析観察すると共に,NICUにおける照明遮断による行動リズムの影響をも観察した。